

形式主語構文と場所句倒置構文の教示法

大川 裕也

1. はじめに

本稿では、伝統的な学習英文法¹における形式主語構文と場所句倒置構文の解説を見直し、より効果的な教示法を提案する。本稿で扱う形式主語（仮主語）構文は(1a)のような文である。この文の意味上の主語は括弧内の *that* 節であるため、(1b)のような形式も容認される。一方、(2a)のような分裂文は、(2b)が示すように動詞 *was* の前に *that* 節を置くと非文になる。よって、形式主語構文と分裂文は区別される必要がある²。

- (1) a. It is obvious [that John loves Mary].
 b. [That John loves Mary] is obvious. (田子内・足立 (2005: 9))
- (2) a. It was the tone of his voice that surprised me. (ibid.: 99)
 b. * That surprised me was the tone of his voice. (ibid.: 101)

場所句倒置構文は、(3a)のように主語名詞句と場所句が倒置された文で、基本語順に従った文(3b)に対応する。

- (3) a. [On the dining table] is [a vase of glass with roses].
 b. [A vase of glass with roses] is [on the dining table]. (久野・高見 (2007: 272))

(1a)の形式はあらゆる場面で頻繁に用いられるが、(3a)のような場所句倒置構文の使用域は小説や文学作品などのようなものに限られる。

英語を母語としない英語学習者は、(1a)や(3a)のような構文の形式と(1b)や(3b)のような基本語順に則った形式の間に生じる本質的な違いを理解していないことが多い。その要因の一つとして、「英語では長い主語を避ける」という特徴を学習英文法で強調し続けてきたことが挙げられる。さらに、従来の学習英文法では、単文レベルの文法の教示に傾倒してきたことも無視できな

い。これらの問題に関する詳細な議論は次節以降に委ねる。以上の問題を解決することによって、英語を母語としない英語学習者でも形式主語構文や場所句倒置構文を用いる動機づけとなるものを十分に理解し、当該構文を用いて効果的にメッセージを伝達することができると思われる。

2. 英語では長い主語を避けるのか？

英語を母語としない学習者に対して「以下の文を英語で表現してください」と質問すると、どのように回答するだろうか。

(4) 勇敢であることは好ましくないことだ。

様々な回答が期待される中、(5)のように回答する学習者がほとんどであった。

(5) It is not desirable to be brave.

質問の対象者は、中学生から英語を学習し、かつ大学で英文学科や英語学科に籍を置く学生の中で、英文法の知識が豊富であると判断された者である。そのような対象者に(6)のような英文を提示すると、あたかも自身が英語母語話者であるかのごとく「この文は英語としてふさわしくない」と断じるのである。

(6) To be brave is not desirable.

なぜ学習者は(6)のような文を回避するのであろうか。この問いに対する明確な答えを見出すために、著名な英文法学者及び英語学者が著した英文法書における形式主語構文の解説をここで概観しよう。

江川(1991)による『英文法解説』は、「受験英語のロングセラー」とうたわれることもあるが、より高い水準の英語力習得を志す学習者から英語の本質の追隨に余念がない研究者に至るまでの幅広い層によって今もお参照されている。項目ごとの解説は少ないものの、良質な英文を豊富に盛り込むことにより、「実例がすべてを語る」ということを読者に印象づけている。

江川は不定詞の名詞用法（主語として）のセクションで以下の対比を提示している。

- (7) a. To become an expert at anything takes time.
- b. It takes time to become an expert at anything. (江川 (1991: 315))

江川は、(7a)の主語は to 不定詞節 (*To become an expert at anything*) であると解説していることに加え、(7b)の方が多く用いられることにも言及している。さらに、形式主語の *it* のセクションでは、(8a)の *it* は不定詞節の内容 (*to introduce ...*) を指示し、(8b)のような解説を与えている。

- (8) a. It gives me great pleasure to introduce our special guest for this evening.
- b. ... 形式主語に *it* を使うのは、長い主語が前に出て頭でっかち (*top-heavy*) の格好の悪い文ができるのを避けるためである。
(江川 1991: 50)

なお、この点においては綿貫ほか(2000)による『ロイヤル英文法』でも同様の解説が見られる。

次に、Quirk et al. (1985)による *A Comprehensive Grammar of the English Language* での記述を見る。この英文法書の真価は、文法項目や実例に対して詳細にわたり解説を施している点にある。この英文法書の解説や実例は様々な文献で引用され、新たな語法研究の糸口となることが多い。

Quirk et al. (1985)では、形式主語構文を“Extraposition of a clausal subject”の項で扱っている。(9)のように、形式主語構文は、より正統な語順 (*more orthodox ordering*) から派生したものであるとし、*subject* が文末に置かれ (*postponed*)、*subject* に先行する (*anticipatory*) *it* が通常の主語位置に置かれたものと説明している。さらに、江川などと同様に、形式主語構文の方がより普通 (*more usual*) であると述べている。

- (9) a. subject + predicate ~ *it* + predicate + subject
- b. To hear him say that + surprised me ~ It + surprised me + to hear him say that
(Quirk et al. (1985: 1391-1392))

最後に、安藤(2005)による『現代英文法講義』の一節を紹介する。英文法の詳細な記述に心血を注いできた著者は、今日に至るまで日本における英文法・英語学研究を牽引してきたことは言うに及ばない。この英文法書において注目に値する点は、純粋な英文法の記述に留まらず、生成文法に代表されるような理論言語学的な視座での記述を試みている点である。では、長年にわたる研究の集大成ともいえるべき大著の中で、形式主語構文はどのように記述されているであろうか。

(10) a. PRO To finish today is important.

b. It is important to finish today.

(安藤 (2005: 204))

江川や Quirk et al.と異なる点は、不定詞節内にある非定形動詞の潜在的な主語を PRO で表していることである。そして、安藤は(10a)を格式体とみなし、(10b)は重い(複雑な)構成素を文末に回すという「文末重心の原理」が適用されたものであるため、(10a)よりも(10b)が好まれると解説している。

以上の解説から、基本語順の文よりも形式主語構文の方が頻繁に用いられると一般化することが可能である。情報的に軽いものを左方に、重いものを右方に置くという典型的な情報構造の観点から考察すると、この説明は妥当である。そして、学習者はこの一般化をあらゆる場面に応用する傾向がある。次の例を検討しよう。

(11) In the gym ran most of the track team, avoiding the impossible weather outside.
(久野・高見 (2007: 275))

(11)は主語名詞句と場所句が倒置した文、すなわち場所句倒置構文である。学習者の多くは、場所句倒置構文は形式主語構文と同種の構文であり、長い主語を避けた結果として生じた文であると考えがちである。しかし、適格であると判断される(11)が以下のように用いられると不自然と判断されるのである。

(12) It rained a lot. ? In the gym ran most of the track team, avoiding the impossible weather outside.

さらに、(13)のように、場所句倒置構文では長くない（情報的に軽い）主語も容認される。

- (13) Just inland from this, against its background of sheltering trees, stood the house. (BNC: CKF)

安藤が指摘する文末重心の原理は英語の諸特徴の一つであることは否定できない。しかし、(12)の不自然性や(13)の適格性を説明するためには、文末重心の原理以外の何かが作用していることを解明しなければならない。この点は次節で議論する。

3. 情報提示の順序

前節で挙げた問題を解決するために、本稿では情報提示の順序の重要性を主張したい。まず、場所句倒置構文の実例を見てみよう。

- (14) Greenway unfolded the newspaper on Ricky's bed in front of them ... At the bottom of the front page was a headline about Romey. NEW ORLEANS LAWYER COMMITS SUICIDE IN NORTH MEMPHIS. Under the headline to the right was a big photo of W. Jerome Clifford ... (John Grisham, *The Client*)

(14)では、*At the bottom ...*と*Under the headline ...*の2文が場所句倒置構文である。最初の場所句倒置構文では文頭の場所句が前出の“newspaper”の中にある特定の部分を指し、2番目では場所句が前出の“headline”そのものを指す。このように、場所句倒置構文は、文頭の場所句が前出の内容を引き継ぐ形式であれば容認される。

次の例も同様である。

- (15) The interior of the school building seemed to me as old and dusty as an abandoned house. Down at the end of the long hallway stood a group of six or

eight girls. ... Along one wall hung a large board with pegs holding many tiny wooden plaques ...
(Arthur Golden, *Memoirs of a Geisha*)

第2文の“the long hallway”は前出の“the school building”の中に存在し、第3文の“one wall”は“the long hallway”の中に存在することが容易に想定できる。

場所句倒置構文の適格性と情報提示の順序が深く関わり合っているという事実は、次の例においても明らかになる。先に挙げた(11)と(12)を再検討しよう。

(16) In the gym ran most of the track team, avoiding the impossible weather outside. (= (11))

(17) It rained a lot. ? In the gym ran most of the track team, avoiding the impossible weather outside. (= (12))

(17)では、第2文の場所句に含まれる“the gym”が前文の内容を引き継いでいるとは考えにくい。ため、(17)の場所句倒置構文は不自然と判断される。一方、久野・高見(2007)によると(16)は適格であるが、この文が単独で適格と判断されたとは考えにくい。英語母語話者が自然な文脈を想定したために、(16)は適格であると判断されたと考えるのが妥当であろう。

次に、形式主語構文について考察しよう。場所句倒置構文と同様に、情報提示の順序を乱さないことを念頭に置けば、以下の2文の本質的な違いが明確になる。

(18) a. To be brave is not desirable. (= (6))

b. It is not desirable to be brave. (= (5))

(18a)は to 不定詞節の内容が談話において既出の内容である場合に用いられる一方、(18b)はそうではない。(19)はこの事実を傍証する一例である。

(19) “No, no, we are not brave, we are very frightened”, was the inevitable response when I asked why they always fled. This was not a matter of excuse, but a statement of fact. To be brave is not desirable. (BNC: CJ1)

(19)の最後の文は形式主語構文ではなく、基本語順の文である。これは、“be brave”という既出の内容を首尾よく引き継いだ文である。このように情報を提示することによって、読み手は容易に内容を理解できるのである。

従来の学習英文法では、(18b)のような形式が好まれると説明するものが散見されるが、このような説明だけでは学習者を誤解に導きかねない。(18a)のような文も使用可能であることを学ばせるには、学習英文法において情報提示の順序の重要性を説くべきである。

4. 結論

本稿では、従来の学習英文法における形式主語構文と場所句倒置構文に関わる解説の問題点を指摘し、情報提示の順序を基盤とした教法を提案した。英語を母語としない学習者は「英語では長い主語を避ける」という特徴を様々な文に適用しすぎる傾向にある。これが誤解の根源となり、主語の to 不定詞節や that 節を動詞の前に置くこと（基本語順に則ること）を回避してしまう。本稿では、場所句倒置構文は、文頭の場所句が前出の内容を引き継ぐ形式であれば容認されることを主張した。この特徴は情報提示の順序と深く関わっており、形式主語構文とそれに対応する基本語順の文の本質的な違いも適格性を統一的に説明することができる。

5. 英文法の教法：眺望と課題

日本にはかつて、西洋の一步進んだ知識や文明などを西洋の書物を通して会得しようと意気込み、英語の習得に血道を上げていた時期があった。日本における英語熱の兆候を示す時期であったのかもしれない。そして 20 世紀初頭、科学的な視点で言語にアプローチし、言語の記述を体系化する向きが強まった。以来、体系化された「英文法」は英文読解の要となり、より多くの人々が外国語としての英語を習得できる機会に恵まれるようになった。同時に、英語（とりわけ英文和訳や和文英訳）を入学試験の問題に採用する諸学校が著しく増加した。数多の自然言語の中の一つにすぎない英語であるが、

日本では「受験英語」という新たな言語変種のような通称で、英語は広く一般的になった。

受験英語の基軸は単文レベルの英文法である。例えば、いわゆる基本 5 文型は、英語の文が日本語の文よりもシンプルであることを学習者に啓発し、英語を母語としない日本人の英文読解力にとって強大な手がかりとなった。時を経て、Quirk et al. (1985)は 7 文型、安藤(2005)は 8 文型を提唱するなど、文型論の議論は隆盛を極めた。基本文型の習得が英語習得の基盤となるという信念は、基本文型を精緻化する推進力になったといえる。

受験英語の恩恵を受けた者たちが後進の指導にあたる。以下の英文は、そのような伝統が少なくとも日本では継承されていることを示すものである。

- (20) I like very well to be told what to do by those who are fond of me; but never to be told what not to do; and the more fond they are of me the less I like it; because when they tell me what to do, they give me an opportunity of pleasing them; but when they tell me what not to do, it is a sign that I have displeased, or am likely to displease them.
- (21) The dictionary tells us that luck is the favorable or unfavorable occurrence of a chance event that could not have been foreseen. Of course, we don't need a dictionary to define luck for us: it is one of the critical aspects of our lives, and it plays an important role in how we make sense of things that happen to us, and to others. You don't have to be a gambler or a fortune teller to believe in luck. Even people who consider themselves completely rational and who immediately dismiss superstition will still say "good luck" every now and again; perhaps they assume that the other party believes in luck, even if they don't believe in it themselves. But believe in it or not, luck is unavoidable.

両文章の内容と長さから判断して、受験英語に馴染み深い日本人であれば「これは最近の国立大学の入試問題ではないか」と推測するかもしれない。実際のところ、(20)³は 1913（大正 2）年度の官立高等学校大学予科の入学試験に出題された和訳問題で、(21)は 2006（平成 18）年度の大阪大学の入学試験に出題された和訳（下線部のみを和訳する）問題である。官立高等学校大学予科は、古めかしい言い方をすれば、大学の教養部に該当するものなので、

(20)は現行の大学入試問題に相当すると考えて差し支えないだろう。時代は異なっても、基本文型を重視する日本の受験英語に際立った差異は見受けられない。以上の入学試験問題は、そのような背景を表出している。

では、基本文型だけでは補いきれなかった知識は何か。それは本稿でこれまで議論してきた情報の提示方法ではないだろうか。従来の学習英文法では、単文レベルの文法に拘泥してきた嫌いがあった。このようなやり方では、(18)や(19)のような英語に対応できない。入学試験に出題された(20)や(21)のようなパッセージも、それぞれの文が無機的に集合した文の塊のように見えてしまう恐れがある。やはり、単文レベルの文法を基盤とし、それを有機的に談話レベルの文法の教示へシフトすることが理想ではないだろうか。そうすれば、先の入試問題のようなパッセージもより立体的に見え、文章を解釈するという本来の目的が達成されるはずである。そして何より、学習者が英語で自身のメッセージを効果的に伝達する際の一助となるはずである。

しかし、談話レベルの文法の教示に関しては、課題も残されている。まず、情報提示のルールは厳格ではないという点である。言うまでもなく、基本文型は厳格である。例えば、“S + V + O”というルールを知っていれば、(22a)が適格で、(22b)が非文であることは容易に判断できる。

- (22) a. I love him.
b. * Love I him.

一方、情報提示のルールはどうであろうか。前述の(17)の「？」が示唆することは、これを適格と判断した母語話者もいれば、不適格と判断した母語話者もいるということである。母語話者の間においても意見の相違があるため、情報提示のルールは基本文型ほど厳格に定式化できるものではないと結論づけなければならない。

さらに、英語母語話者の間でも食い違いとされる情報提示の方法を、英語を母語としない者が学習者に教示できるのかという問題がある。英語を教える者は常に生きた英語を蓄積・整理することを厭わず、英語母語話者の直観に迫る勢いで英語という言語に向き合うことが、この問題の解決に資するのではないだろうか。

形式主語構文と場所句倒置構文の教示法（大川）

本稿は平成 24 年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である。

【注】

- ¹ 本稿における「学習英文法」とは「教育と関連した英文法」(大津 (2012: 3))のことである。現在においては、中学校以上に相当する学校で教示される英文法と考えてよい。従って、本稿の「(英語を母語としない) 英語学習者」は、諸学校で英語を学ぶ生徒及び学生を指す。
- ² 田子内・足立(2005)では、分裂文の分裂節は焦点構成素に対応する空所を含むという点で、形式主語構文とは異なることを指摘している。従って、分裂節そのものが文として成立しない。
- (i) *Surprised me. (田子内・足立 (2005: 99))
- ³ 入学試験問題の詳細は、江利川(2011: 62)を参照されたい。

【参考文献】

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社, 東京.
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 金子書房, 東京.
- 江利川春雄 (2011) 『受験英語と日本人：入試問題と参考書からみる英語学習史』 研究社, 東京.
- 久野暉・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味：生成文法と機能的構文論』 開拓社, 東京.
- 大津由紀雄 (編著) (2012) 『学習英文法を見直したい』 研究社, 東京.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leach and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- 田子内健介・足立公也 (2005) 『右方移動と焦点化』 (英語学モノグラフシリーズ 11) 研究社, 東京.
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚久 (2000) 『ロイヤル英文法』, 旺文社, 東京.

【コーパス】

British National Corpus (Shogakkan Corpus Network)
(ULR: <http://bnc.jkn21.com/>)